［地域総研所報　No.3，P11－22（1996）（一般論文）］

明日のよりよき相互理解のために
―― 日本人の外国人に対する意識調査結果報告 ――[*1]

片　島　康　夫[*2]
奥　村　訓　代[*3]

On a Survey on Japanese Sentiment towards Foreigners[*1]

Yasuo KATASHIMA[*2]
Kuniyo OKUMURA[*3]

Contents

はじめに

1．調査の対象と方法

2．調査結果

1）どのような機会に外国人と接触したのか

2）接した外国人について

3）どのぐらい外国人と接したことがあるのか

4）外国人とのコミュニケーションについて

5）外国人との交流について

まとめ

[*1] Received January 21, 1996 [*2] 長崎ウエスレヤン短期大学専任講師 Department of English, Nagasaki Wesleyan Junior College, Isahaya, Nagasaki, Japan 854 [*3] 長崎大学助教授

はじめに

文部省の方針に基づいて、国公立大学はもとより、私立の教育機関も積極的に留学生を受け入れるようになった。在日留学生は年々着実に増加している。〈注1〉また、日本のほとんどの都市で、外国人を見かけることは珍しくなくなった。長崎の諸地域も例外ではない。そのような状況の中、国際化が叫ばれ、様々な国際交流の試みが行われるようになった。今では、特に在日外国人留学生の増加にともなって、様々な国際交流団体主催の国際交流イベントやパーティーに、多くの人が参加するチャンスも多くなった。地域の日本人が外国人と接触し交流する機会は年々増加してきている。

よく言われている「国際化」とは、外国語が話せるとか、外国へ行ったことがあるといったものではなく、国籍や人種を越えて、ある国、またはある地域の文化、価値観などを知り、理解すること、または、国籍、人種、宗教などで差別することなく対等な個人としてお付き合いをするということを含んでいなければならないのではないだろうか。その点について、外国人の日本人に対する評価は厳しい。〈注2〉

交流が増える一方で、摩擦も増えていることは否定できない。ある韓国からの留学生は、初対面の日本人に韓国で起こっている労働争議などの社会不安は日本ではもう過去のものとなったと言われ、不愉快に思ったという。また、あるアメリカからの留学生は、外出時に、人々から好奇の目で見られるので、自分は普通の人なのだから普通の人として扱ってほしいと訴えていた。残念ながら外国人留学生の日本に対するイメージは、あまりいいものではなく、滞在期間が長くなれば、日本に対する理解も深まり対日イメージもよくなるのではないかという期待に反して、滞在期間の長い留学生のイメージもあまりいいものではなかったという調査結果も発表されている。〈注3〉

一方、日本人の側からは、外国人は不作法だ、わがままだという声が聞かれることがある。確かに実際に留学生と接してみると、彼らの日本語の能力や、日本の文化、習慣に対する理解は十分であるとは言いがたい。日本に来て間もないころで日本語などの学習を始めたばかりの留学生では、いたしかたないと言わざるを得ないが、日本人の側からすると、日本に来ているのだから必要な日本語を覚えて日本の習慣や礼儀作法についても理解してもらいたいというのが正直なところであろう。しかしながら、我々日本人が外国人と接するとき、彼らが公の場で日本人の目から見て不作法と思われるようなことをしても、外国人だからと指摘しないことが多いのではないだろうか。日本の習慣やマナーについて知らない外国人の勉強不足、理解不足を非難することはやさしいが、我々の接し方についても考え直さなければならない点があるように思う。

文化や習慣を異にする者が接触するとき、当然そこには誤解や摩擦が生じることが考えられる。つまり、両者間のトラブル、摩擦、すれ違いなどは、どちらが悪いということではなく、お互いの理解不足が原因であることが多いのである。とは言っても、理屈では分かっていても、あるいは外国人だから大目に見ようと思っても、感情がそれを許さないということがある。長年培われた習慣に反する、我々の文化では不作法だと思われることに対しては、腹がたつというのが正直な感情であろう。この点については、日本に滞在している外国人には十分理解しておいてもらわないと困るのである。日本に住み、日本語で日本のことを学んでいる留学生ならなおさらのことである。何も日本人のようになれと言うのではない。日本で学ぶからには日本で生活する上で必要なことは知っていてもらわないと、留学生自身が困ることになる。日本人と摩擦ばかり起こしていると、留学生自身の留学の目的も達せないということにもなりかねない。もちろん留学生を受け入れている機関もそのような教育を行う責任があると思う。

さて、外国人留学生を受け入れている地域とそこにある学校などの教育機関の、いわゆる国際化が進み外国人留学生数が増加することは歓迎すべきことと受けとめられているが、実際に地域の人々の外国人に対する感情はどうだろうか。外国人、特に留学生が日本または日本人についてどう思っ

ているのかという調査はよく行われているが、留学生が学んでいる地域の日本人は彼らのことをどう受けとめているのであろうか。つまり、我々受け入れる側は、外国人留学生を本当に歓迎しているのだろうか。あるいは、歓迎しているとしても、意志疎通や文化摩擦などの問題はないのだろうか。このような調査はあまり行われてこなかった。

そこで、外国人留学生が学んでいる教育機関のある地域で、実際に外国人と接している日本人が、外国人との交流の機会に外国人についてどのように感じているのか調査することは意義深いことと思われる。なぜなら、異なった文化や習慣をもったものが集まり交流するときに、誤解などによるトラブルも少なからず生じていると考えられるからである。外国人との交流の実態を明らかにすることによって問題の所在を明らかにし、その問題を乗り越えていくことによって、よりよい国際交流がもてるはずだからである。

1．調査の対象と方法

調査はアンケート用紙にて行った。長崎県内の国際交流に関わる団体、個人200件に郵送して協力をお願いした。調査は1995年1月から3月にかけて行われた。回答があったのは、77件で、そのうち有効回答は71件であった。

今回調査を国際交流に関わる団体、個人に限ったのは、日頃国際交流の仕事をしていて、外国人と接する機会が多いので、文化や習慣の違いによる行き違いや摩擦などを感じることが多いのではないかと思ったからである。今後は、一般の人にも同種のアンケート調査を行うことを計画している。〈注4〉

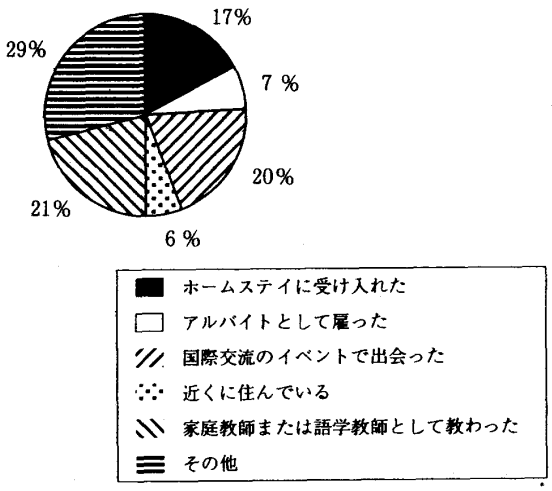
2．調査結果

1）どのような機会に外国人と接触したのか

初めに回答者に最近接触した外国人について質問した。「どのようにその外国人と接触しましたか」という質問には、予想どおり国際交流の仕事の関係で外国人と接触したという答えが多かったが、意外に仕事以外の機会に接触している例も多かった。

一番多かったのは「家庭教師または語学教師として教わった」の15人で全体の21％であった。しかし「ホームステイに受け入れた」が12人で17％、「国際交流のイベントで出会った」が14人で20％であった。また、その他に職場の同僚で職場で顔をあわせているという人が4人いた。合計すると30人で、全体の42％に上る。〈表1〉後述の質問のところで述べるが、外国人と接していて困ったことがあるという人は回答者全体の49％にも達しており、その中でも、言葉が通じない、英語（外国語）ができないという人がかなり多く、意志の疎通ができずに困っているようだ。そのためか、外国人に語学教師になってもらって英語などを教わる人が多い。この最初の質問でも、そういう理由から、「家庭教師または語学の教師として教わった」ことが外国人と接触した一番の理由として挙げられているのではないだろうか。事務的な連絡にはあまり困らないようだが、接する外国人の中には日本語がまったくできない人もいて、仕事上、語学の必要性を感じている人が多いようだ。

〈表1〉どのようにその外国人と接触しましたか？



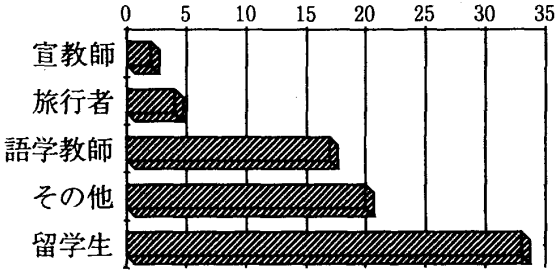
今回の調査の回答者の中に、仕事以外の機会に外国人に接したことが多いというのは意外だった。国際交流団体主催のイベント以外の日常の生活の中でも外国人と接する機会が増えているということは、一般の人も外国人に接する機会が増えてきているということであろうか。

2）接した外国人について

接した外国人の職業について質問したところ、

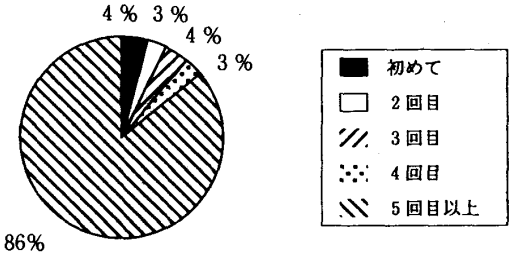
やはり留学生が33件（44％）で、一番多かった。〈表２〉次いで、語学教師が17件（22％）、旅行者が４件（５％）、宣教師が２件（３％）となっている。国際交流団体主催のイベントに参加する外国人の多くは留学生であるから、留学生が一番多いというのは、予想どおりであったが、外国人が近所に住んでいるとか、ホームステイに外国人を受け入れる積極的な例もあり、一般に様々な機会に外国人と接していることがわかる。他には、会社員、県職員、JICA研修生、主婦、僧侶などが、それぞれ１件ずつあった。（尚、一度に複数の外国人と接した回答者もいたので、回答数が回答者数を上まっている。）

〈表２〉接した外国人の職業



３）どのぐらい外国人と接したことがあるか

〈表３〉外国人と接したのは何度目でしたか？

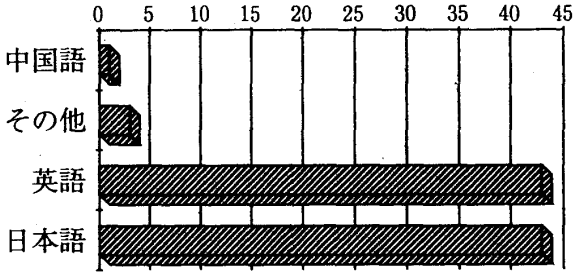


国際交流団体の仕事に就いている人でも外国人に接する機会が少ない人も若干ではあるが、いることがわかった。〈表３〉「その外国人と接触したのは何回目でしたか」という質問に、圧倒的に多かった答えが、「５回以上」の61件で86％であった。次いで「初めて」と「３回目」が３件、「４回目」と「２回目」が２件であった。

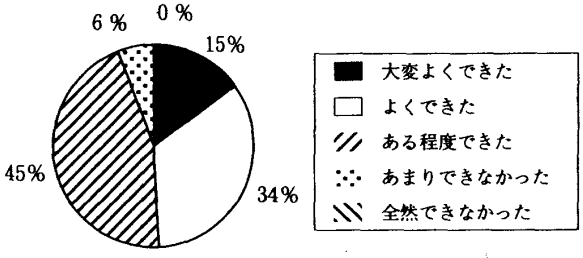
４）外国人とのコミュニケーションについて

「外国人とコミュニケーションするときに使った言葉は何ですか」という質問に一番多かった答えは英語、日本語のそれぞれ44件であった。日本語だけ、または英語だけでコミュニケーションをとるのは困難なようで、英語または日本語を使ったと答えた人の中で、日本語と英語の両方を使ったという人が19人いた。〈表４〉

〈表４〉外国人とコミュニケーションするとき使った言葉は？

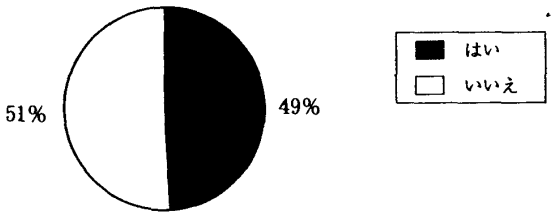


〈表５〉外国人とよくコミュニケーションできましたか？

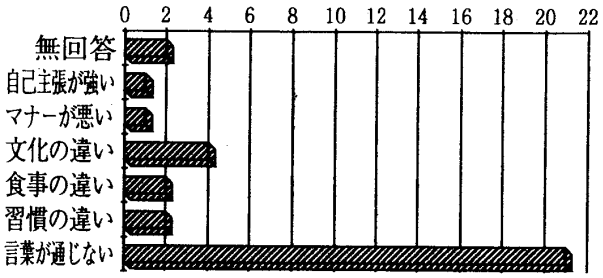


外国人とよくコミュニケーションできたかどうか質問したところ、15％の人が「大変よくできた」と答えた。「よくできた」という人は34％で、「ある程度」できたという人は45％に上った。「あまりできなかった」という人は６％にすぎなかった。「全然できなかった」という人はいなかった。〈表５〉「大変よくできた」と「よくできた」をあわせると、49％にもなる。「ある程度できた」をあわせると94％にもなり、ほとんどの人が外国人とのコミュニケーションに満足している。

〈表６〉外国人と接していて困ったことがありますか？



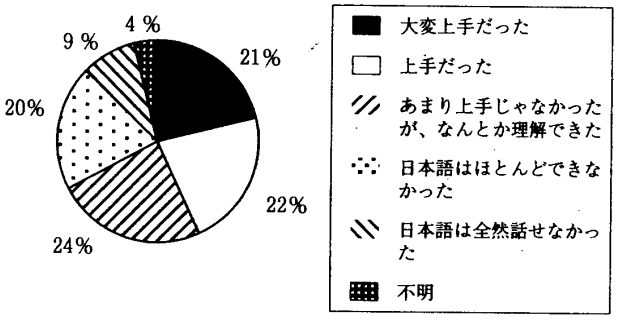
〈表７〉外国人と接してどんなことに困りましたか？



ところが、外国人と接していて困ったことがないかどうか質問したところ、「はい」と答えた人が全体の49％(35人)に上り、そのうちの21人(全体の29％)が「言葉が通じない」と訴えている。具体的に「日本の歴史について説明できなかった」とか「細かいニュアンスの違いが伝わらなかった」「日本語特有の表現が伝わらなかった」などを挙げている人がいる。〈表６、表７〉このことから、事務的な簡単な連絡事項を伝えるのには、さほど困難を感じないのかもしれないが、より具体的なこと、細かい深い内容については伝達するのに言葉の壁を感じている人が多いということが分かる。やはり、国際交流事業の仕事をされているからか、日本のことについて外国人にもっと分かってもらいたい、日本の文化や習慣についても知ってもらいたいという気持ちが強いようだ。しかし、様々な国際交流の催しを企画しても、深い踏み込んだ内容の意志疎通が、なかなか難しく、特に言葉の問題を感じている人が多いことが分かる。

外国人の日本語の能力については、「大変上手だった」が16件で21％、「上手だった」が17件で23％で、回答者が接した外国人の44％が日本語の能力を高く評価されている。「あまり上手じゃなかったが、なんとか理解できた」がいちばん多く18件で、24％だった。「日本語はほとんどできなかった」が15件で20％、「日本語は全然話せなかった」も７件(９％)あった。留学生以外の外国人も含まれているのだからしかたないが、「あまり上手じゃない」「日本語はほとんどできない」「日本語は全然話せない」をあわせると53％にもなり、「日本語が上手だ」の44％を上まっている。前述の外国人と接したときの問題として言葉の障害を挙げる人が多いことと共通していて興味深い。〈表８〉

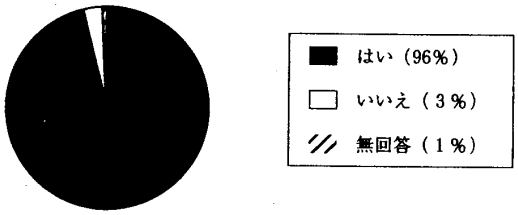
〈表８〉接した外国人の日本語の能力



５）外国人との交流について

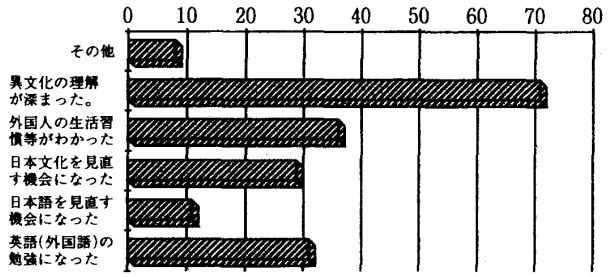
外国人との交流についてはどのように感じているのであろうか。いろいろと困難を感じていることはわかったが、外国人と接すること自体についてはどうだろうか。「外国人と接してよかったと思いますか」という質問には、96％の人(68人)が「はい」と答えている。「いいえ」と答えた人はわずか２人であった。無回答の人が１人あった。〈表９〉

〈表９〉外国人と接して良かったと思いますか？



「外国人と接してどんなことがよかったですか(複数回答可)」という質問の回答の中でいちばん多かったのが、「異文化の理解が深まった」で、全回答者の100％（71件）がそう回答している。次いで「外国人の生活習慣などがわかってよかった」が50％（36件）、「英語（外国語）の勉強になった」が43％（31件）である。「日本文化を見直す機会になった」、「日本語を見直す機会になった」は意外に少なく、それぞれ40％（29件）、15％（11件）だった。〈表10〉外国人との交流を異文化理解の機会としてとらえている人が多く、それに比べると自国の文化や習慣を見直す機会と考えている人が少なかった。

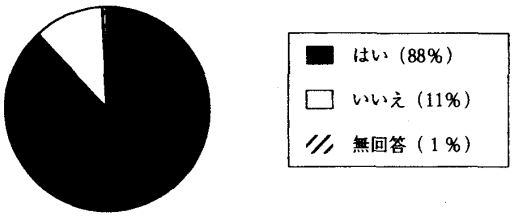
〈表10〉外国人と接してどんなことがよかったか



「4）外国人とのコミュニケーションについて」の項でも述べたが、「外国人と接していて困ったことがありますか」という質問には、49%の人が、「はい」と答えている。残りの51%が、「いいえ」と答えた。〈表6〉「いいえ」と答えた人、31人のうち、「言葉」の問題をあげたのは20名で、いちばん多かった。「文化の違い」をあげたのは、4人。次いで「食事の違い」と「習慣の違い」がそれぞれ、2人、「マナーが悪い」、「自己主張が強い」と無回答がそれぞれ1名ずつあった。言葉が通じず、コミュニケーション上困難を感じていることが、最も多い理由として挙げられているが、文化や習慣の違いに困っている人もいることが分かった。なかには、「自国の生活習慣をそのまま押し通す」外国人もいると、不満を隠さない人もいる。

回答者の多くは、外国人との交流について、多少の不満や難しさを感じてはいるが、交流自体には意義を感じている。それは「あなたと外国人はいい交流ができましたか」という質問の結果に明らかに出ている。〈表11〉質問に「はい」と答えた人は、62名で全体の88%にのぼる。「いいえ」と答えたのはわずか8名で、11%にすぎなかった。無回答が1件あった。

〈表11〉あなたと外国人はいい交流ができたと思いますか



まとめ

調査結果はおおむね予想どおりであったが、いくつか興味深い結果が得られた。やはり、いちばん大きな問題点として明らかになったのは、言葉の問題で、外国人の日本語の能力を比較的高く評価しているのに比べ、日本人の側に言葉の問題を感じていることであった。

しかしながら、長崎県に滞在または在住している外国人は世界中からやって来ているわけで、できることにも限界がある。むしろ、日本人の側が、語学のできないことをコンプレックスに感じないで、積極的に日本語で交流するのが、望ましいように思う。日本で日本語で多くの日本人と交流することこそ、外国人留学生たちにとって有意義な経験となるのではないだろうか。国際交流の場は、外国人が、日本の文化や習慣を、直接日本人と交流するなかから、学びとれる非常に重要な機会だと思う。

しかし、コミュニケーションの手段が見いだせず、文化のギャップからくる摩擦が外国人と日本人の相互理解を妨げている。故直塚玲子氏は彼女の著書のなかで、こう言っている。「異文化間のコミュニケーションで何か問題が起こると、しばしば欧米人の論理でことが片付けられ、日本人の立場は、無視されがちである。このことに、長い間、私はひそかな怒りを燃やしていた。」〈注5〉日本人の間では、感情をむやみに表に出すのは、はしたないと考えられているため、外国人にはなおさら、わかりにくい。このことが問題を深刻にすることがある。怒りをあらわにしない日本人と、特に個人の気持ちを大切にし、場合によってはすぐ行動に移す文化を持つ外国人が交流する場合、ある程度の誤解による摩擦は覚悟しなければならない。

交流の機会が増えれば、それだけ摩擦や衝突の可能性も増えることになる。特に留学生は勉学を目的に来ているのだから、受け入れ先の教育機関に対する不満や批判があるのは当然であるが、岩男、萩原両氏の調査でも明らかなように、外国人留学生の日本または日本人に対する批判の内容は多岐にわたり、「特定の側面に集中して言及がな

されるような傾向はあまりみられない」。〈注6〉しかし、いくつかのカテゴリーを設定し調査した結果、日本で経験した不愉快な出来事として、「外国人に対する日本人の態度、偏見や差別に不快感を示す回答が最も多くあらわれており、」しかも「その割合が日本語能力、滞在期間とともに増加する傾向のあることが」わかった。〈注7〉また、「外国人に対する偏見や差別を直接に反映するものではないが、日本人とのトラブルや人間関係の難しさを最も不愉快な経験とする回答も多い」と報告されている。〈注8〉

以上のことを念頭に、国際交流のあり方を考えたとき、乗り越えないといけないハードルの高さに、戸惑いさえ感じる。今回のアンケート調査でも、外国人と接していて困ったことの具体例は、言葉の壁、文化等の違いによる誤解や摩擦に戸惑いを感じている人の多いことを示している。

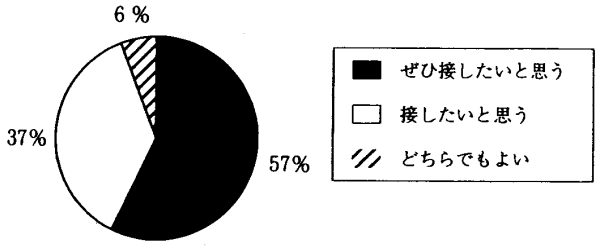
その反面、外国人との交流には多くの人が「よかった」と答えていて、文化習慣の違いを越えて積極的に外国人と交流していこうという、気持ちがあらわれている。「価値観の類似や相違を互いに認識することができた」、「言葉が通じなくても」交流をとおして「相手の気持ちがわかり」、「人間みんな同じだということが実感された」など異文化交流の有意義な点が挙げられている。また、「外国人から見た日本の印象など、いろいろな面で学んだ」、「日本人の尺度で」ものごとをみるのではなく「外国人の尺度を知ることができた」と自らのあり方にも目を向けるようになったという例もいくつか挙げられている。

困ったこととして挙げられたのは、言葉の問題以外には、外国人が「マナーを知らない」、「食事の違い」に戸惑った、宗教上の理由で食べられないものがあるので気を使う、「日本料理が苦手」で困った、などが挙がっている。接した外国人の「自己主張」が強すぎると感じられ、不快感を示す回答もあり、「日本では嫌われ、人間関係がこわれるもとになることを知ってもらいたい」という意見もあった。外国人にも「郷にいれば郷に従え」の気持ちが必要と感じている例もいくつかあった。

外国人と接していて困ったという人が、全体の半数近くもいたにもかかわらず、外国人と接してよかったと思うという人は、全体の96%にもなり、ほとんどの回答者が、外国人との交流の機会を歓迎し、好意的に受けとめていることがわかったのは何よりも幸いであった。

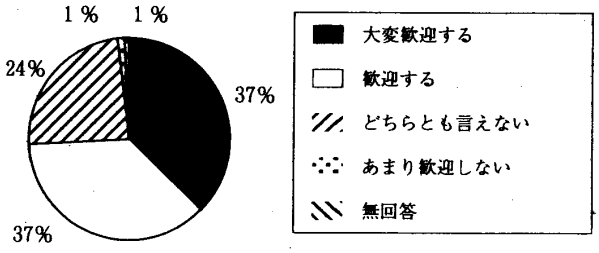
最後に「また外国人と接したいと思いますか」、「今後、あなたの生活している地域で、外国人が増えることを歓迎しますか」という二つの質問に対する回答の結果を報告して本稿を締めくくりたい。

〈表12〉また外国人と接したいと思いますか？



前者の回答は、「ぜひ接したいと思う」が41人（57%）、「接したいと思う」が26人（37%）、「どちらでもよい」4人（6%）という結果であった。「あまり接したいと思わない」と「もう接したくない」という回答は1件もなかった。つまり、全体の94%の人が、ぜひまた接したい、あるいは接したいと思っており、接したくないという人は皆無であった。〈表12〉

〈表13〉今後、あなたの生活している地域で外国人が増えることを歓迎しますか



次に後者の回答の結果は、「大変歓迎する」が26人（37%）、「歓迎する」が26人（37%）、「どちらとも言えない」が17人（24%）であった。「あまり歓迎しない」という人が1名で、「まったく歓迎しない」という人はいなかった。また、無回答が1名あった。「大変歓迎する」と「歓迎する」をあわせると、全体の74%となるが、「どちらとも言えない」と「あまり歓迎しない」という消極

的な回答を合わせると25%にも上ることは注目に値する。〈表13〉

上記二つの質問の回答結果から、外国人と交流することを望む人が回答者の全体の94%に上る反面、自分の生活する地域に外国人が増えることについて歓迎する人が74%で、消極的な人が25%いることがわかった。つまり、外国人と交流することには積極的だが、地域社会に外国人が増えることには積極的に歓迎できない人が、何人かいるということになる。この結果からも、異文化コミュニケーションと国際交流の難しさを痛感せざるをえない。

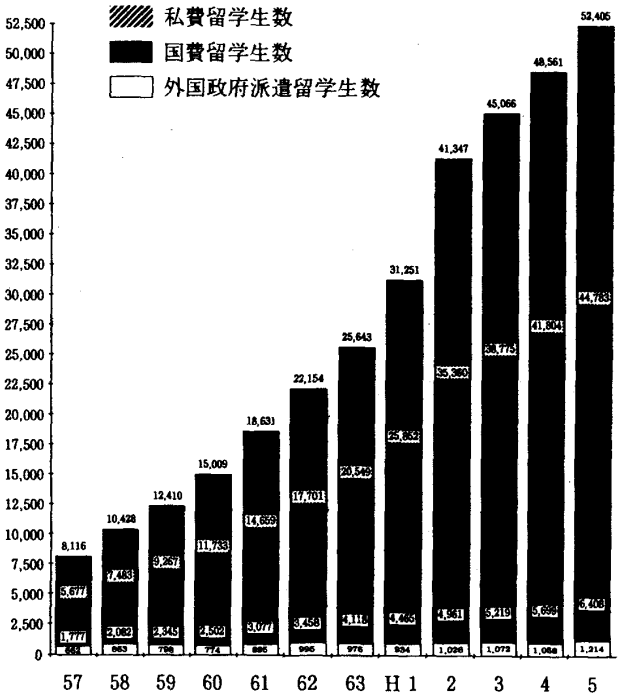
これまでみてきたように、国際交流の場などの機会に、日本人と外国人が接した場合に、両者ともに、摩擦や困難を感じており、場合によっては、不快感やいらだちの感情を抱くケースもあり、これはやむを得ないことである。むしろ、そのことを認識し、お互い忍耐をもって接することが大切ではないだろうか。直塚氏も指摘するように「何が礼儀正しいことで、何が無礼なことであるかは、文化によって、正反対の場合がある」〈注９〉ことを、日本人も、日本に滞在している外国人も、肝に銘じておくべきであろう。

人類の歴史は対立と紛争の歴史であったが、和解と相互理解の歴史でもあったと思う。違う文化が接するとき、相互理解の試みが欠けると、悲劇的な結果になることは歴史が証明している。国家間の交流も世界的規模で拡大している国際社会で、相互理解と相互受容の精神はなくてはならないものである。国家レベルだけでなく、個人のレベルでも、そのことが求められることは言うまでもない。日本国内においてさえ、留学生をはじめとして、多くの外国人が滞在している。その数は年々増加していることは冒頭でも述べたが、よりよき相互理解の未来を目指して、我々日本人ひとりひとりも、違いの壁を乗り越えていかなければならない時代を迎えていると言えるだろう。もちろん、お互いの努力が求められるところであるが、日本人の側から積極的に日本人自身の価値観、伝統、文化、考え方や意見などを発信していくことも必要だろう。忍耐のいることではあるが、お互いに違った存在を認め尊重しあい、受け入れあって、はじめて、よりよい相互理解の未来が見えてくることと思う。

〈注〉

〈注１〉 留学生数の推移（全国）

（各年５月１日現在）



（注）外国政府派遣留学生は、中国、マレーシア、インドネシア、タイ、シンガポール及びブラジルの各国政府派遣留学生です。

長崎地域留学生交流推進会議事務局編「ながさきと留学生――特集平成５年度留学生アンケート調査報告――（第９号）」（1995.） p. 26.

〈注２〉 たとえば「日本人はどのような外国人が好きか」という質問に対して「他の地域よりも欧米先進諸国の人たちに日本人が好意的に接することを示唆する回答が全体の半数以上にのぼり、特にアジア系留学生の間でこうした回答への極端な集中が認められる。また、日本で経験したもっとも不愉快なできごとにしても、やはり外国人に対する日本人の態度、偏見や差別にかかわるエピソードが最も多くあらわれているのである。」（岩男寿美子、

萩原滋著『日本で学ぶ留学生――社会心理学的分析――』剄草書房（1991.）p.158. 以下同書は『日本で学ぶ留学生』とする。）〈注７〉の表「日本で経験した最も不愉快なできごと」を参照されたし。

〈注３〉　『日本で学ぶ留学生』「まえがき」「（日本で）国際化が声高に叫ばれてきたにもかかわらず、」「留学生が問題視する日本人の態度」はまったく変わっておらず、「日本語ができるようになれば彼らの留学生活もスムーズになり、対日イメージが好転するのかと予想すれば、反対に日本語が上達するにつれて対日イメージが悪くなり、日本人をつきあいにくい、冷たいと捉えているのである。」とある。

〈注４〉　「〈資料１〉長崎県の国際交流団体」を参照されたし。（今回のアンケート用紙送付先）

〈注５〉　直塚玲子著『欧米人が沈黙するとき――異文化間のコミュニケーション――』大修館（1990.）p. 29.　（以下、同書は『欧米人』とする）

〈注６〉　『日本で学ぶ留学生』p. 162.

〈注７〉　『日本で学ぶ留学生』p.163.

〈日本で経験した最も不愉快なできごと〉

1	外国人に対する日本人の態度，，偏見，差別	35%(449)
2	相互理解の難しさ，誤解された経験	7%(91)
3	日本の教育制度，授業内容	3%(36)
4	酒にまつわること	4%(46)
5	それ以外の日本の風俗，習慣	10%(127)
6	性的いやがらせ	3%(44)
7	その他	21%(272)

	出身地域別				日本語能力別		
	アジア系 (909名)	欧米系 (299名)	その他 (88名)		低 (401名)	中 (388名)	高 (512名)
1	36%(330)	32%(95)	26%(23)	1	28%(113)	35%(136)	39%(200)
2	7%(65)	7%(20)	7%(6)	2	8%(33)	6%(25)	7%(33)
3	3%(29)	2%(5)	2%(2)	3	4%(14)	2%(7)	3%(15)
4	3%(23)	7%(20)	3%(3)	4	5%(21)	3%(11)	3%(14)
5	9%(82)	12%(37)	9%(8)	5	12%(46)	10%(39)	8%(42)
6	2%(18)	7%(22)	5%(4)	6	6%(25)	3%(13)	1%(6)
7	19%(171)	27%(82)	22%(19)	7	26%(106)	18%(68)	19%(98)

	滞日期間別				
	～6カ月 (235名)	7～18カ月 (258名)	19～30カ月 (248名)	31～47カ月 (292名)	48カ月～ (260名)
1	27%(64)	31%(81)	36%(90)	35%(101)	43%(111)
2	6%(13)	7%(18)	8%(19)	9%(25)	6%(16)
3	1%(3)	3%(7)	4%(11)	2%(7)	3%(8)
4	4%(10)	3%(7)	3%(7)	4%(12)	3%(9)
5	10%(23)	9%(23)	10%(26)	12%(34)	8%(21)
6	6%(14)	5%(12)	2%(6)	2%(7)	2%(5)
7	22%(55)	26%(67)	20%(49)	19%(56)	17%(44)

〈注８〉　『日本で学ぶ留学生』p.160. 〈注７〉の表参照。

〈注９〉　『欧米人』 p. 127.

〈資料１〉

長崎県における主な国際交流団体

㈶長崎県アジア交流財団
長崎県高等学校国際教育研究協議会
㈳長崎県国際親善協会
長崎県留学生交流協会
長崎県青年団連合会
長崎県地域婦人団体連絡協議会
長崎県日韓親善協会
長崎県日中親善協会
長崎県日中親善協会佐世保支部
長崎県ラテン・アメリカ協会
㈶長崎県国際交流協会
長崎県日朝親善協会
㈳長崎青年協会事務局
長崎県ボランティア協会
長崎県世界青年友の会
長崎県企画部国際交流課
長崎県教育委員会社会教育課
長崎県教育委員会生涯学習課
長崎市企画部文化国際課
長崎市立中央公民館
長崎市役所観光課
国際交流市町村連絡協議会
長崎日豪協会
長崎日独協会
長崎日仏協会
長崎日伯協会
長崎日蘭協会
長崎日本ポルトガル協会
長崎上海クラブ
長崎シンガポール協会
長崎日米協会
長崎マレーシア協会
長崎オランダ親善協会
㈶長崎平和推進協会

長崎青年会議所
㈳長崎青年協会
長崎ユネスコ協会
長崎地域留学生交流推進会議
長崎商工会議所
長崎ＹＭＣＡ
長崎ボランティアガイドクラブ
長崎通訳研究会
長崎国際人倶楽部
長崎有職婦人の会
長崎ライオンズクラブ
長崎中央ライオンズクラブ
長崎北ライオンズクラブ
長崎出島ライオンズクラブ
長崎南ライオンズクラブ
長崎第一ライオンズクラブ
長崎平和ライオンズクラブ
東長崎ロータリークラブ
長崎ロータリークラブ
長崎東ロータリークラブ
長崎北東ロータリークラブ
長崎南ロータリークラブ
長崎西ロータリークラブ
長崎中央ロータリークラブ
ながさき南部生産組合
熱帯医学研究所
青年海外協力隊ＯＢ会
九州青年の船長崎県連合会
日本海洋少年団長崎県連盟
阿蘭陀船ば創る会
宗教法人カトリックイエズス会永井学生センター
国際ソロプチミスト長崎
子ども文化協会
㈳長崎歴史帆船協会
日中両国人民朋友会
日本中国友好長崎県民の会
平和と冒険の会長崎
アジア平和婦人連合長崎支部
国際交流塾
鳴滝新国際塾
ラボ国際交流センター
国際交流部会
大村市日中親善協会
佐世保市姉妹都市協会
佐世保日豪協会
佐世保日米協会
佐世保国際交流実行委員会
佐世保インターナショナルレディスクラブ
松浦市国際親善協会
諫早市教育委員会生涯学習課
㈳諫早青年会議所
諫早西ロータリークラブ
三和町中央公民館
多良見町教育委員会
多良見町ホームステイ協会
森山町教育委員会
小長井町教育委員会
大瀬戸町国際交流協会
大瀬戸町役場企画課
崎戸町島おこしグループ新緑クラブ
端穂町英会話スクール
端穂町中国語サークル
美津島町国際交流推進協議会
北有馬町青年団
伊王島町国際交流係
上対馬町おっどん祭り実行委員会
布津町立飯野小学校
布津町教育委員会社会教育課
せちばるで国際交流を楽しむ実行委員会
海外・ヴォスロール姉妹都市委員会
中浦ジュリアン倶楽部
福島青年友愛会
ふるさと大島「いきながしょうもん」
芳州会
津島物産振興協会
青年の家
雲仙小浜ライオンズクラブ

〈資料２〉

回答者内訳

男	59%（42）
女	38%（27）
不明	3%（ 2）
20代	21%（15）
30代	21%（15）
40代	31%（22）
50代	15%（11）
60代	6%（ 4）
70代	3%（ 2）

〈資料３〉

回答結果（内訳）

〔質問１．どのようにその外国人と接しましたか〕

ホームステイに受け入れた	17%（12）
アルバイトとして雇った	7%（ 5）
国際交流のイベントで出会った	20%（14）
近くに住んでいる	6%（ 4）
家庭教師または語学教師として教わった	21%（15）
その他	29%（21）

〔質問２．接した外国人の職業は？〕

留学生	44%（33）
語学教師	22%（17）
宣教師	3%（ 2）
旅行者	5%（ 4）
その他＊	26%（20）

＊会社員（１）、公務員（４）、カメラマン（１）、学生（１）、船員（１）、JICA研修生（１）、主婦（１）、無職（１）、僧侶（１）、不明（８）

（一度に複数の外国人と接した回答者もいた。一度に２名の外国人と接した回答者が２名、３名の外国人と接した回答者が１名いた。よって、回答者数は71名だが、外国人の数は76名である。）

〔質問３．その外国人とコミュニケーションするとき、主に使った言葉は何ですか〕

日本語	62%（44）
（日本語のみ使用）	33%（23）
（英語と一緒に使用）	29%（21）
英語	62%（44）
（英語のみ使用）	33%（23）
（日本語と一緒に使用）	29%（21）
英語と日本語	27%（19）
中国語	1%（ 1）
その他	5%（ 3）

〔質問４．その外国人とよくコミュニケーションできましたか〕

大変よくできた	15%（11）
よくできた	34%（24）
ある程度できた	45%（32）
あまりできなかった	6%（ 4）
全然できなかった	0%（ 0）

〔質問５．あなたが接した外国人の日本語の能力はどうでしたか〕

大変じょうずだった	21%（16）
上手だった	22%（17）
あまり上手じゃなかったが何とか理解できた	24%（18）
日本語はほとんどできなかった	20%（15）
日本語は全然話せなかった	9%（ 7）
不明	4%（ 3）

（一度に複数の外国人と接した回答者もいるので、接した外国人数が回答者数を上まわっている。〈資料２〉の〔質問２〕の項を参照されたし。）

〔質問６．外国人と接していて困ったことがありますか〕

はい	49%（35）
いいえ	51%（36）

〔質問７．［６.の質問に「はい」と答えた方］どんなことで困りましたか。具体的に書いてください。〕

（本文Ｐ．15を見られたし）

〔質問８．外国人と接してよかったと思いますか〕

は　い	94%（68）
いいえ	3%（ 2）
無回答	1%（ 1）

〔質問９．［８.の質問に「はい」と答えた方］どんなことがよかったですか（複数回答可）〕

英語(またはその他の言語)の勉強になった	43%（31）
日本語を見直す機会になった	15%（11）
日本文化を見直す機会になった	40%（29）
外国人の生活習慣などがわかってよかった	50%（36）
異文化をより理解することができるようになった	100%（71）
その他	11%（ 8）

〔質問10．あなたと外国人はいい交流ができたと思いますか〕

は　い	88%（62）
いいえ	11%（ 8）
無回答	1%（ 1）

〔質問11．また外国人と接してみたいと思いますか〕

ぜひ接したいと思う	57%（41）
接したいと思う	37%（26）
どちらでもよい	6%（ 4）
あまり接したいと思わない	0%（ 0）
もう接したくない	0%（ 0）

〔質問12．今後、あなたの生活している地域で、外国人が増えることを歓迎しますか〕

大変歓迎する	37%（26）
歓迎する	37%（26）
どちらとも言えない	24%（17）
あまり歓迎しない	1%（ 1）
まったく歓迎しない	0%（ 0）
無回答	1%（ 1）

〈参考文献〉

『異文化理解のための日本語教育Ｑ＆Ａ』
文化庁編（1994.）
『欧米人が沈黙するとき――異文化間のコミュニケーション――』直塚玲子著、大修館（1990.）
『新時代の留学生交流』外国人留学生問題研究会（JAFSA）編、めこん(1990.)
『日本で学ぶ留学生――社会心理学的分析――』岩男寿美子、萩原滋著、剄草書房（1991.）
『入門国際交流』国際交流基金編、文化庁（1994.）
「アジア留学生の現状」
アジア留学生会（大阪）編（1988.）
「一般外国人に対するアンケート調査結果報告書」
文化庁文化部国語課編（1993.）

「ながさきと留学生――特集平成５年度留学生アンケート調査報告――（第９号）」
長崎地域留学生交流推進会議事務局編（1994.）
「長崎地域における留学生生活」
長崎地域留学生交流推進会議事務局編（1993.）

謝　辞

ご多忙にも関わらず、今回のアンケート調査に、ご協力くださった方々に心からの感謝を申し上げる。

また、長崎ウエスレヤン短期大学地域総合研究所の皆様には、本研究の主旨をご理解いただき、研究助成をいただいた。データの入力、分析には、長崎ウエスレヤン短期大学日本語研究会のみなさんにもお手伝いいただいた。

ここに記して、感謝の意を表します。